

911.3
キ
中

書
來
抄

中

去来抄 中

同門評

種も然り柳のさし取まふ少 芭蕉

浪化集よさるる柳と書せり乞ハ予ハ誤傳なるなりかきて
史邦ハ小文庫ハ柳のさるる誤お付支考曰さるる柳なり
改傳也去来曰さるる柳といふに支考曰柳のさるるは
も然り障る如しと比諭せるも然り去来曰さるる柳のさ
さりりさるなりさるる柳といふも格ハ支え傳る故
かきて予ハ誤をたす支考曰吾子の説ハ切るる



只藤る柶とて一丈竹曰 朝のほつきいさくた趣向を
支考々いする加くむむ去来曰 流るのまきうをさるる
口惜し比論よしてき難くもいそん世ささのたは
いくそく及ふいさ格位も又各別なりと論は許六曰
先師の短尺よさはる柶もありそと柶のささるとい首
切まなり 去来曰 其切のささハ平々閑々よ異之今論に
おのそん先師の文を柶のささるとはあり許六曰 先師
あとより世し終ふ句多し真跡も證とくそととなり
三子皆く藤る柶の説なり後賢杉判しなまへ
去来曰 いくを竹故やありそん藤さ句ハ汝も流し重くそん

人よゆはすくくはと江府より半竹終ふも後大切の柶一平を藤に
けし並ふも支考も終たまよんともと後後あ集りも
除れどもに浪化集撰の半子先師は化わたりハ此句は
むかしく終ん事と恨てそ入集りまあせける

雪は日小免乃皮の幣つくま 芭蕉

曾町曰 此句意いさ去来曰 あまも子ともと遊びてと
あはれんとも乃業と思ひそへし 強て理會すくは
機弁と踏破してゑへし 先師は句を 諸終ふに予
甚盛 却寸先師曰 是を悦ん者 越人と汝のうも
らむと思ひしにそへてきりて終るの機嫌

馬の耳すなめをきく梨子の花 支考

去来曰馬の耳すなめをきく梨子の花 支考
とせしれしるゆなり支考曰何のくま事なるん
昔子の如くかいらなり一とちにいひくさむしを難ま
るなれと論す曲翠曰二子互にえざるまを易し
ゆさるを難しとす甚論ともんをなり志しとも思
をいそ一とちにいひ下さんハかゝるし一去来曰翠亦
えしれざる故なり凡修りも我うぬるまをやくい
いはんえざるまを學り次にすみあんおのれ終に
ゆゑ不ならしとて他の捕るるまをやくすハ功を

なするゆにあらし

白水のなうしもきくはるす 木尊

甚角曰おはいまいつあるは詞なり去来曰角いられと又
とおもつるめや是ホきカもなるし一ききハそれ他也

去来曰予此趣向ありき句き有明の花よ乗込とらひて
月毛駒芦毛馬とき詞つまはるしの文字と入れ口に

たまはるし駿馬を推あしん紅梅錯月毛川系毛かと
おもひめくしそそ尾せりしうし後許六句と見て
不才と嘆すうに畠山た朱門佐といへど大名の名とて

山畠佐太夫といふ一字とくつに彦彦の名なり先師曰
句とくをすんハ古頭ハ千轉せよとありしもいふ事こ

起さぬにまもつとせし一麩の足 杜若

乾鞋と唱くりや能は、 雪也

くくいすのゆてえんをなうけさう 他意あり

去来日伊賀の連流もあはなる風あり是則先師の一跡也
迂化の後すくま一初のことくの類なりそ愚なるれ
もそ及く一支考日伊賀は句ハさせるともまもあは
いやか一伊賀の連流も上手なり

雪の古よふて花乃 羊残

去来日まうにやといふ風情わし一乗なりといひても

句みなるまう一てやの文字千金なり羊残ハまもあは

者也夫州曰てやといふわたり上手のことあは一とえんこと

くくいすのゆてえんをなうけさう 其角

雪の岩よすりくおき、のれ 素行

去来日角く句を暮春の乱雪也初雪の身と連する曲奇

初の字ハゆき一行く句ハ雪雪の姿もあはれ出さうゆき

者然る怖れて花あうりするすく或ハ練捨ふは又まもより

くくいすのゆてえんをなうけさう 凡もあはれとあはれ

中情を知つて也去くさる時を珍物奇言も鬼とくともいふ

そ本情を交さる者一一角う功者す時をりて過て
る多し一初学の人懐ますんハあまうりし

相の本然風をかまらぬ為る事也 凡兆

昔角曰是先師の糧の本然等類なり兆曰去りし
詞つきの似る能くはるる大西かゝる去来日
多段ともりし一同巢の自なり同巢を以て能せ
早う風の地西も為さぬけりふしり巢とよりて
滝川の底つりぬく養かと言出ていさう手柄
なりしと兄より生れ猶きんハ又吾子なり

去来曰 駒笑に出逢ふ所をの事也 野明

去来曰駒笑小人の出逢ふ所をの事也又此巻の
風情を野明曰爲のとなり去来曰くめりさハ
情れと昔子然俳諧の初と遠せんと思はさり一故
たつたところま入情るのそ支考曰句然秀拙ハともうも
野明此場を去り向りし不審也と感吟守り人
教るり年ありきて通せ氏一とせ先師女目より然
に依せしれより稜群上をせり常子俳友なく修り
むなり後れとも先師をうめ大村支考なとれや
今吟しそ外の事功を去りね故のけりか
句も去来より誠なる事とるむ一平生にまの

弱きを強くす

あゝ山猿のつゝ栗の巻 小書

花散て二日君はぬ 中系うき

正秀曰嵐山を少年の句をいへるも風情あり落をハ
愚功の入るも花をいへる少年の句をいへる去来曰
二日とこれぬといへるあり代家の落よまよひと
蕉門の大子嬌よまなり

あは時の心安さよけし 越人

其角許六ともに云は白はいおほせさる故に僧を別る
とてといへるあまあり去来曰罌粟一体の白とて

いおほせさるり妙あともいへるなるあり

電のうきおせしり 周夜うき 去来

夫村支考ともい下のお文字過り回つちとと
有と云来曰物と重くはたす電の強は周叔の句也
句をいへる論寸も後夫村の語て日退て思ふた
あまを電の句と云へる向あま只電の強は周叔の句也
故に何とも中傳る夫村曰さいりいへる電をいへる

ほととすは帆裏なるや夕まふれ 先故

たしめハヤを明石浮といへる後集にあまおせり
可南曰いへる故にや去来曰時を帆裏なるやとて

舞のありて下をさるるはそくろくかへん又らんをら
まかよしの許六曰あかうちふちのこころをいへん悲作てみえ
ホー交也

鞍壺は小跡のゆるや大根引 芭蕉

風國曰此句いふなるまゝの面をまき去來曰吾子いよ解
くくくん只國一をさるるはそくろくかへん又らんをら
奇山幽谷靈社古寺禁闕のよゆうハも暑ようくんよま
うけ急なる多し一物のそくろくの熱ハ墨のあし
みそあしん孫一くくさるるはそくろくかへん又らんをら
てかへらこ能ま一くくぬも能あしん是ホハもらより

よて景情たれはけり一は明不浮をまをむるはるるお
祢たりとらん可南日同集の年七う子親も明るこの
かりゆるや去来日卯七う獲自ハ趣向と二つ三つとりかき
他するもおあはれ又下意を物せて他するこそ格あなり

とくは後を名もあうらんお美 辨 玄梅

許六日是を證經をゆと云然せん考をそなりうをお勢也
又日人あり路よそ人よまひそよへやり一ト下へやり一
と后と宣ふととてよとをありは去来日よへやり一
とくよとと懸ひて下と決一とくゆ急語路不通なり
又懸ひて決さるとりてのそもあはれけお美辨ハよん

難ありて下とをゆとくはそくからん又らんをら一
みかよの許六日おかくらふとゆとては懸ひてあえ
お一交也

鞍壺よ小跡のゆるや大根引 芭蕉

風國曰此句いかなるそら面をま去来日吾子いふ解一
とくらん只國一とあはれ一たてた花と圖をるん
奇山幽谷靈社古寺禁闕のよらんハもあうらんよま
うゆ急よと名多一折のそくの敷ハ墨のあ一と
あそあはれ孫一とくはそらとをやとん又圖をる一
てかてらと名ま一とくぬもあはれは是ホハもらより

國のありさまをて用ぬられも今猶一く本情の候ある
圖ありて是と盡とありてもよろしくむ句とありても
よろしくんさへて大根引の傍ふ草とむ馬の首とち
さけとむむ鞍つかよ小坊とのちよつらりと系とる國
おほくも言うらんやおほくもや案一とるは一
國り兄何某却て國よりも感動すくハ悦遊
志とありてても盡とありてすも故也画師尚景
子なり

夕くれを鐘とちうくや寺乃秋 風國

此句を一を晩鐘のさくくくめくふ句ハ忘り

風を曰此山寺子晩鐘とまくに曾てさひくあり
信を他と去来曰是殺風景也山寺とつひ秋のゆふ
とつひ晩鐘とつひ寂くふるの頂上なり志くれば
一端游興騷動の内子聞さくくくはとふを一己の
私なり風を曰此時は情ありハいかに情をも他と
さくふや去来曰恙情ありを別のこくはも他せん
とる句ハあせり句論句掛はさくといても中言
あつりあ

應くとつと敲くや雪の門 去来

夫叶曰此句不易うしてはりのた中とる

支考曰、此、正、考曰、

先師の支考、此、正、考曰、

當時他人を羨み、此、正、考曰、

許六曰、此、正、考曰、

去来曰、此、正、考曰、

先師送化乃、此、正、考曰、

行も、此、正、考曰、

歳年の公教や神の光を去来

大宰府奉納の句なり、許六曰、

法あり、此、正、考曰、

公教や神の光を去来

公教や神の光を去来、此、正、考曰、

去来曰、此、正、考曰、

情、此、正、考曰、

中也世上の句、此、正、考曰、

公教や神の光を去来、此、正、考曰、

一、此、正、考曰、

公教や神の光を去来、此、正、考曰、

中、此、正、考曰、

又、此、正、考曰、

浄余講やあまねまきふれば五匹 許六

去来曰七字形といふ人はいく是と云さハ一句をとり
おまへん許六曰志をとりハ自然の事と求て他す一うは是ハ
七字を以て後句となる也其角もさうかと評しけり

門口や牛王めくけと初しとれ 他志不効

去来曰此句表根より入せしむる其角の韻法解の
門札の句と多れと評す予志誤なりと云はハ少し
似と云ふもけハくくくく除て一句の熱体と云は
門とらひれと云ふと云や多れの評をなせりといはるし

猪の鼻とすつとす西風也 卯七

去来曰させりといふ一之四分の句なり正秀曰猪なして
てそ鼻をくすつとす一とんとをほひりて後先所も
一興ありと云り去来曰退て思ふに此句いさゝ上方ハ
西風めつとす一とんとをほひりて猪のあや
しと云ふも風情をなせり予ハ西風と云はれそ西風も
何れかのとくさしと云ふともおまへんさうと云ふそ
ゆきりりり熱て人の句をまくに云りある場と云ふ
さる場と云ふにたふひ有つと云ふ鹿の鼻をさて退けり
人の汗をたのしと云ふといふ勢也

慢改て人を尋よやまさうと 其角

許六曰是之謎と云句也去来曰是、

何處も句也たは之を提燈て人々

を提燈てたは之を提燈て人々

人々を提燈てたは之を提燈て人々

むら一團句也提燈てたは之を提燈

たのおやをてまへ句也提燈てたは

おやをてまへ句也提燈てたは

魯町曰此句或人の長束也去来曰

杜年曰先師の藤子かまへと云男

あや去来曰先師の句を去来と云

巧句の春也句上句なり去来曰

去来曰去来曰去来曰去来曰

出まはれと云句也提燈てたは

魯町別露の句也去来曰去来曰

柔の類と云句也提燈てたは

言下子賦しり云と云句也提燈

せんとい魯町別露の題と云去来

始ゆ紫桂の賦と云句也提燈てたは

とた付手、漢門と云句也提燈

集りも出る先師の句も提燈てたは

去来曰當時世間の仙者翁の薙の句あるを厚はくの
本槿なとの句伴まよひあきまよふ句と吐かへ芭蕉流
とたゆえに族おかへて軍みまへせんふこれと
記すも然也

年とや赤中の夜き星月夜 其後

元日や土つふに教もせは 去来

許六曰當時元日とりふ冠用らまへき経あり 去来曰
元日ハ嬌ふつふ云子あへんやの字よ懐みまへ
け難なるへへは句元日といへん外なりやハ嘆羨
とる顔也許六曰其角は句と吟へまきといへて歳旦に

あへん元日ハいひ古くなりと観ふ先師曰さくうりれ
他者ハ元日といへんハ拙くもへへとて年とやとを
重なるも又やの字ハ嘆賞のやといふハなりハつれ
やハ疑のやとを習傳る去来曰其角は句と記してハ
先師かくのへまふへへ予う句に記してまさいのたま
へへ他者乃甲乙ともてまきをあへん已くも志す
ふよ遠あり平ハ孫抱新詞ともて常子才二多ハ
重なるそこハ先師も能見ゆるへへ又嘆羨の
やハ名目もまへへ名目と記しては治定のやハ治定
もも嘆息嘆羨あり世話もまへへや虎山翁切り

やむさう坊なとら皆治定嘆羨也と論すは後賢
判一終一

風國曰是根の羨句一句は季節と二つ入るもくせより
類句一つや去来曰一句は季節二つ入るも類なる一
もとより好む事のみありは

許六曰一句は季節と二つ用るは初句のなりたる事也
季と季のながしきあり去来曰一句は季と二つ用るは
功者初句よなるは許六の季の通ふまに
習ありといふ事予はいまの知る事也
盲より啞乃くはゆふ月見の事 去来

去来曰此句ハ十七八年前の句なりは先師も
さういふ事とありは句也を事新し
感懐といふも句位と論するに及ては甚下品也
蕉門の俳友中これ様なる句は或連歌師の曰
花のもとにてけ句の評あり俳諧もかる感懐の句あり
あふつりうらなかり是を羨せし句と受けはる所の
連歌師はこれよりいふおもひゆる

季牛花の暮を足せり風の秋 許六

一説け句先師の暮の暮の面足せりと写れたうりと
許六曰等類はあつた足せりとを刻のむとひまを

類句か、何れ去来曰等類と、心一 同樂の句なる
た、大和哥を能く、如常盤の曲の語、たの比、
長き人、心にあはせ、如常盤の曲の小言、麻、た
なす、如秋、心、た、た、た、た、た、た、た、た、
俳諧の如き、如き事也

志、何、中、紅、の、小、袖、を、吹、く、
去来

云、秀、曰、心、の、如、き、事、也、
句、層、也、去来曰、正考、評、心、の、解、
志、く、も、て、來、る、扇、の、路、上、子、の、小、袖、吹、く、
け、し、共、如、き、心、た、ら、ず、出、た、る、の、風、と、詠、
す

一、の、俳、諧、
心、の、如、き、事、也

心、の、お、り、に、
心、の、如、き、事、也

生、飄、の、心、
心、の、如、き、事、也

心、の、如、き、事、也
心、の、如、き、事、也

去来曰、附句、
心、の、如、き、事、也
句、体、重、く、
心、の、如、き、事、也

心、の、如、き、事、也

梅、の、花、赤、い、
心、の、如、き、事、也

惟、然

去来曰惟然坊々今の風大くは乞木の藪なり此後句は
あつた先師迂化の歳の夏惟然坊々詠諧と導乎終ふ
まはるる口質のまよりすめて磯添まきりくくと
浪しらて或ハ枚の本よすくくと風の吹りりなと
いふを羨し終ふ又俳諧を氣持^{ナキ}て吾分別も他す
一一とのいまい亦は後いよく風体々るらんなど心
あひるる事と同あよひあつた子みりうけて身の集の
哥仙も終る事よふ維子あつるくくくの雪終句なるとに
先師評一一終る句勢句姿なるといふこの地うりた
みなく忘却せしゆと見えたり

行はして見五湖烹煎の音とす

素堂

なま人の小神もいすや土用か

芭蕉

素堂子の句は深川芭蕉菴にたけり終る句なり先師の
句を予々妹々才あつりるる以英法の国より増終る句なり
ともにそるる我いかなむたけり本れ足は此ある集と
んる小先師の事とも出らるる素堂子の
句とおけりり蛸のたけり中よ来ると我もて名人達人と譽言
らばりりそれをもて名人といふるもやうら向先師の
句もかくのこり皆人の知るるもやうれのとあつた
世話も人幸いなるめたるたけといふ一氣の意通

自然の妙應かゝるも亦あるも然と云ふ一紙は痴人
面筋愛を説くすともなり

梅白一は然ふや鶴と盗あり 芭蕉

去来曰言苑集よけ句とあけて先師の事とならりけ句
辱つつ一りといひ是亦ハおのろろと并へて評せり
秋風ハ洛陽の富豪よ多して市中を去山家よ閑居して
詩歌をたのしむ騷人と愛すと因らりれは速一らと
更にかれを風騷の隠逸人とおもひ居る文苑あり
いくありとむむ後 振付とも新語ハ此や評哉
えさふりけい 伝 誦なること知れり

くさひすの海向てなく 涙すの浦 卯七

雪もとと一め他せり 野坡曰もとあゝ人よりのやそり
の文字よりむ去来も是も同一なる文抄曰のト
いひて風情ハ情れとたうにもといはんるまき信
一と也



